

関敬吾から受け継ぐもの、受け継がなかつたもの

小澤俊夫

協会)です。

たいへん生意気な題にしましたが、関敬吾の研究者としての意義と位置をはつきりさせることは、後進の者にとって必要なことだと思つたからです。

受け継ぐもの、これを認識することは、そう困難ではありません。彼の業績をつぶさに検討すれば自ら明らかになるのですから。しかし、受け継がなかつたもの、これの認識は簡単ではないし、もちろん、ひとによつて認識は異なることになります。しかも、研究の発展にとっては重要なことだと思うのです。何故なら、この認識がないと、後進の徒はいつまでたつても彼の、一般的に言えば偉大な業績を残した研究者の、つくつた枠組みを越えて研究を発展させることができないからです。

関敬吾は多面的な業績を残しました。資料の分類という面では「日本昔話集成」全六巻を遺したし、ドイツ系の昔話研究の理論を要約の形で日本に紹介しました。なかでも方法論として重視されるのは、フィンランド学派の歴史・地理学的方法をなぞらえた、独自の伝播経路研究だと思います。そして、その意味で重視されるべき著作は、「日本の昔話 比較研究序説」(昭五十二年、日本放送出版

関敬吾は多面的な業績を残しました。資料の分類という面では「日本昔話集成」全六巻を遺したし、ドイツ系の昔話研究の理論を要約の形で日本に紹介しました。なかでも方法論として重視されるのは、フィンランド学派の歴史・地理学的方法をなぞらえた、独自の伝播経路研究だと思います。そして、その意味で重視されるべき著作は、「日本の昔話 比較研究序説」(昭五十二年、日本放送出版

関敬吾は多面的な業績を残しました。資料の分類という面では「日本昔話集成」全六巻を遺したし、ドイツ系の昔話研究の理論を、そこでも方方法論として重視されるのは、フィンランド学派の歴史・地理学的方法をなぞらえた、独自の伝播経路研究だと思います。そして、その意味で重視されるべき著作は、「日本の昔話 比較研究序説」(昭五十二年、日本放送出版

カタログに示されたおおまかなストーリーの諸要素から、研究対象である話型の系統をみつけだし、それを地理的に並べて、日本への経路を推察するという方法を考案したのです。「日本の昔話 比較研究序説」にはその試みが、いくつもの話型についておこなわれています。

それがまとめられているのが、「三 日本＝アジア地域の昔話の並行関係」です。そこでは、アールネ・トムソンの「昔話の型」を基本にしてギリシャ、トルコ、インド、ビルマ、インドネシア、朝鮮、ヴェトナムなどの話型カタログを用いて、類似の話、ないし要素を指摘し、日本の話型ないし要素と結びつけています。

ところで、話型カタログというものは、アールネ・トムソンのものを含め、広い地域からその話型の類話を集め、およその構成部分（たいていはエピソード）にまとめて、さらにおよそのモティーフに分け、さらにそれを構成するツーカや要素に分けて列挙してあります。関は、そのうちのいづれかのレベルに、日本のいづれかのレベルのものと類似又は同一のものがあれば、関係ある類話として挙げるという方法をとっています。

そこでは、当然のことながら、ツーカとモティーフという、レベルのちがいが問題になるべきですが、関はその点はほとんど顧慮しません。従つて厳密な系統論を組みたてるには粗にすぎるといわざるをえないと思います。

そもそも～カタログに掲げられている要素、ツーカ、モティーフを任意につなげたものが、現実に類話として存在するかというと、必

ずしもそうではない。そこがカタログの弱点といわざるをえない点ですが、関はその問題はほんと気にしていません。

このようにみてみると、関の考案した、カタログによる系統論の試み（関自身のことばでいえば平行関係という把握の仕方）は、かなり粗いものであることがわかります。しかし、だからといって関の方法と、彼が残してくれたこの「平行関係」の指摘が、無意味であるということにはけつしてならない。私はそれこそ、私たち後進の者が関から受け継ぐものであると思います。つまり、この大まかに平行関係のヒントを得て、後進の者はもつと詳細な系統論にふみこんでいくことができると思うのです。原始林を開拓するには、まずブルトーザーで大まかに切り拓く。それから次第に細かい作業に入っていく。それと同じ順序が昔話研究にも必要だと思うのです。

その意味で、関敬吾の、開拓者としての業績はきわめて大きいものがある、と私は思います。

そして今、現実に、日本の近隣諸国の類話についての詳しい研究が、日本の研究者によって、また近隣諸国の研究との協力によって進められつつある。これは、関の開拓のあとに続く段階として、喜ばしいことだと思います。

関敬吾から受け継がなかつたもの、これについては、現在の研究者はそれぞれに、いろいろな感じ方をしていると思います。私は私なりに現在感じていてることについて述べてみたいと思います。

それは昔話の様式についての研究であります。関敬吾はこれまで述べてきたとおり、開拓者としての大きな功績を残されましたが、

昔話の文芸としての性質、昔話を成り立たせている様式については、ほとんど関心がなかったように見受けられます。若い頃にはドイツの文学について興味を抱いていたようで、グリルパルツァーに関する論文も書いておられます。しかし、昔話研究に入つてからは、昔話の文芸としての側面については、ほとんど興味をもつていなかつたと思います。

岩波文庫に収められた三冊の「日本の昔話」をみると、そのことがよくわかります。これは、「日本昔話集成」で使つた昔話の代表的なものを、いわゆる標準語になおして再話したものです。その文章を、原語とつきあわせてみると、土地のことばで記録されている原話をそのまま共通語になおしたものであることがわかるのです。資料的な意味ではその方がよいと考えたのかもしれません、土地のことばでの表現はそのまま共通語にしても通用するとは限りません。共通語の昔話としての文体（口伝えに文体といふことばをあてるのはおかしいことだが、あえて口伝えの文といふ意味で）が探求されなければならぬと思ふのですが、関の再話にはそれは感じられません。柳田国男とは異なるところです。

また、原話の濁音の扱いに注目してみると、関は、ある場合には清音におし、ある場合には濁音のまま残すなど、そこに意を用いている様子が伺えないのです。多分、話型の資料としての昔話としてのみ見ていたものと思ひます。

関敬吾の研究の功績は上述したような面で十分發揮されているのですから、彼としてはそれでいいのですが、後進の者にとっては、

昔話の文芸的性質、文芸としての様式については関からは受け継がなかつたということを認識しておく必要があると思うのです。関がつくった枠組みの外に、このような問題があることは認識しておかなければならぬ。

特に、伝承的語り手が急速に減少し、人びとの目に昔話がふれるのは本の中ばかり、という状況になつてきた現在においては、昔話をいかなる形で本に収めるか、ということが重要問題になつてきました。そのときには、昔話の表現、構成、文体など、ひつくるめて様式というべきものを学問として正確に把握しておくことが不可欠です。

現代では昔話を享受するのは主として子どもたちですが、子どもたちにとけられる昔話絵本、あるいは再話本はいかなる形であるべきか、という問題も十分に学問的検討に値すると思います。そこでは、口伝えされてきた昔話は、その過程でどんな姿を獲得してきたかという問題が中心課題になります。これは関敬吾は触れなかつた問題ですが、きわめて現代的意義をもつた問題だと思います。

この点については、従来、再話する作家や編集者の判断にまかされていて、さまざまな試みがなされてきました。しかし、伝承者の弊が次第に少なくなり、本に収められた昔話の比重が増加していく現在、これは研究課題として重視されるべきものだと考えます。もうひとつ指摘しておきたいことがあります。これは受け継がなかつたもの、というより、関敬吾において十分でなかつたもの、という意味です。それは外国語を使う能力のことです。

関敬吾はドイツ語で書かれた理論書を翻訳したり、要約して自著の中で紹介したりしています。哲学科でドイツ語を学んだのだと思います。しかし、大正末期、昭和初期のドイツ語教育ですから、読解のみの訓練であつたらうと思います。それも今日のようになんだけれども、今日のように進んだ教育法ではなかつたことと思うのです。関のドイツ語訳も、あまり正確とはいえませんでした。アンティ・アールネの「昔話の比較研究」の訳文を、雑誌から単行本に移す際、全面的に再検討した経験から、私はそれを認めざるをえません。ドイツ語の会話は、関は全くできませんでした。彼のデッティングン滞在と講義は、従つて全く苦渋に満ちたものでした。受け容れ側にとつても。

私は関敬吾の評価を下げようとしてこのことを述べるのではありません。今後、日本の昔話研究が世界の昔話研究に伍して進み、さらに寄与できるようになるためには、関敬吾の語学レベルを越えなければならない、ということをいいたいのです。それは、ドイツ語についてだけでなく、あらゆる言語についていえることだと思います。昔話は言語による造形物であるために、言語が使えなければ、国際的研究にふみだすことができない。関敬吾は、昔話研究史の早い時期にそれをふみだした人ですが、後進の者は、さらに努力しなければならないと思うのです。

関敬吾から受け継ぐものと受け継がなかつたものを考えるとき、我々後進の者は、取り組むべき課題への意欲を、ますますかりたてられる思いがします。

(おざわとしお)